

閃光と爆風 一気に炎

燃える家々 娘抱き川へ

うだるような暑さだった。1945年8月6日朝、当時24歳だった梶野清子(94)＝松山市＝は広島市の自宅で、もんぺを脱いで肌着姿になった。出産を3カ月後に控え、おなかが大きく膨らんでいる。甚兵衛を着せていた1歳2カ月の長女広子も、赤い腹かけ1枚にして座らせた。

空襲の警報が解除され、近所の防空壕(こつ)から自宅に戻り、朝食を作ったところだった。桃太郎の絵が描かれた茶わんにおかゆを入れ、小さな口元にスプーンを運んだ。午前8時15分。そこで意識を失った。

被爆者が「ピカドン」と呼ぶ人類史上初の原子爆弾が落とされた瞬間だった。街を閃光(せんこう)が貫き、爆音がとどろく。爆風で家や商店がなぎ倒され、一気に炎

が噴き上がる。爆心地から約1キロの距離に清子の家はあった。目を開けると、がれきの下敷きになっていた。部屋の中にいたのに外の景色が見える。はい出して立ち上がると、2階建ての家が崩壊し、部材やら崩れた土壁やらが折り重なっていた。目が痛く、口の中がシヤリシヤリする。広子がいない。

必死に捜した。天井の梁(はり)が斜めに落ち、やや浮き上がった部分に広子が体をくの字に曲げてぶら下がっていた。清子はおなかに注意しながら梁の上を歩いていき、広子の体に手が届くと力いっぱい引き寄せた。夢中だった。広子は泣くこともできない様子だったが、息はしていた。

周囲の家が燃えている。すでに逃げ場がなかった。家の裏の川へ急ぎ、水の中へ入った。激しい火炎が火の粉をまき散らして髪を焼く。そのたびに清子は、広子を抱いたまま川の中に頭を沈めた。岸沿いに並ぶ家々が隣へ隣へと延焼し、川に次々と焼け落ちる。灰色に濁った川をたんすや台所用用品が流れていく。

潮の干満の影響を強く受ける川だった。引き潮が始まると浮遊物につかまる人々が流れ、手が離れたと思うと力なく沈んでいった。近くの材木店がかだのようになり、清子は岸へ上がる。想像を絶する光景が広がっていた。(中田佐知子)

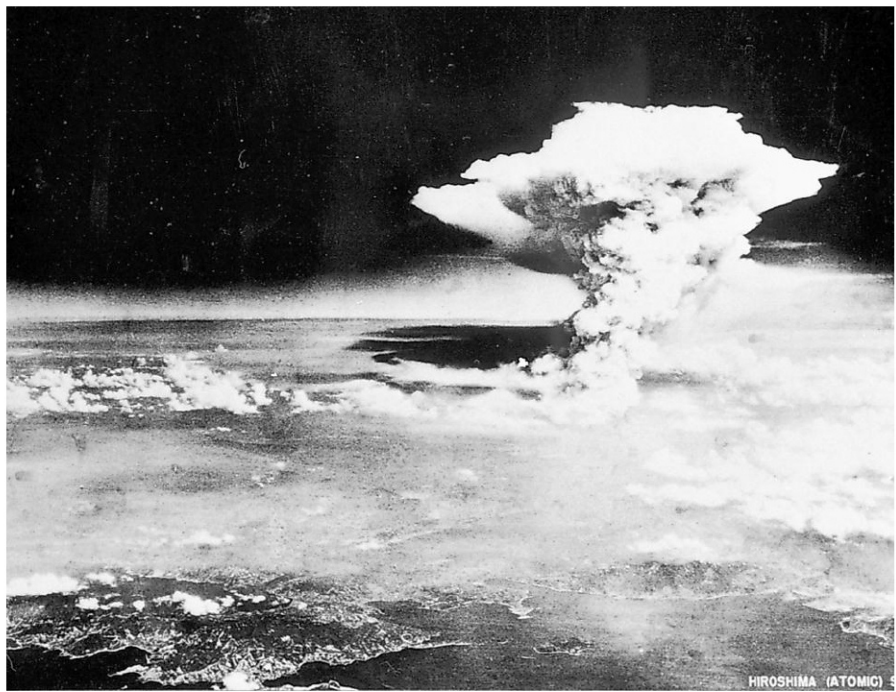
市民の4割が死亡か

広島平和記念資料館によると、広島に投下された原爆は600トン、上空で閃光を放って爆発し、「小型の太陽」のような灼熱(しゃくねつ)の火球をつくり出した。火球は1秒後に最大直径280メートルに膨張して熱線を放射。爆心地周辺の地表面の温度は3千〜4千度に達した。さらに爆発点の周囲の空気が膨張して超高压の爆風が発生。爆心地から半径約2キロ以内では木造家屋がほぼ倒壊し、一斉に火が噴き上がって終日燃え続けた。

同時に放射線が放出され、爆心地から約1キロ以内には多くの人が致命的影響を受けて数日で死亡した。放射性物質を含んだチリやススなどが空気中の水滴と混じり、黒い雨が降った。犠牲者数は現在も正確につかめていないが、広島市は1945年12月末までに誤差1万人前後の約14万人が死亡したと推計する。動員学徒のほか、米軍捕虜や韓国人中国人らも含め、当時の広島市の人口は約35万人。10人中4人が亡くなったことになる。

広島市立大広島平和研究所副所長の水本和美教授によると、被爆者の多くは当初、脱毛や下痢などの症状に襲われ、その後には白血病やがんを発症するなど現在も苦しみが残っている。生き残った罪悪感や放射線障害への不安など心理的影響も大きい。

(高田未来)



松山市上空から米軍機が撮影した巨大なきのこ雲。人類史上最初の原子爆弾が広島市に投下された
—1945年8月6日(広島平和記念資料館提供)

えひめ
戦後70年